幼児の線描表現とその伝達性
―絵が生まれるみちすじ(1)―

Implications of Drawings by Preschool Children:
The Progress in Their Drawings

(1993年4月7日受理)

浅 沼 拓 郎
Takuro Asanuma

Key words: なぐり描き（スクリブル），円形，頭足人

1 はじめに

幼児の初期の絵においては，線描き表現が基本的な特質である。幼児は自分の手の運動の痕跡に注意をむけ，描線を指差し周囲の人に注意と共感を要求する。これは自己満足のみではなく「伝え」の構えの初期現象と見ることができる。特にはじめのころの描線（なぐり描き）はことばとの相互発達が大きなかかわりをもっている。そして，ことばは次第に描かれた形と事物・場面とを結びつけたり，また新しい形をつくりだすきっかけになる。幼児は線によって形をつくり出す方法を覚えれば覚えるほど，事物や場面を「伝える」ことへの興味を強くする（形がものの特質を必ずはつかんではいないものの)。そのように，幼児の絵には言語表現を補う意味性が含まれている。幼児は自分の感じとった心（絵）を，好きな相手の人が心を通してわかってくれることによって，納得し，満足し次への心の出発となるのである。幼児画の理解は絵に表れたその意味を十分に汲むことから始まる。従って，大人のかかわり次第で，幼児の紙上での線描き（描画活動）は本質的な「伝え」の活動に移っていく。しかし，一般的には，なぐり描き段階についての認識がはなはだ乏しい。その理由の一つには，この段階の活動が（年令的に）家庭の中で演じられるということにもよる。また線描の発達が，同時期に見られる言語の急速な発達の後をやっと追っているようで，このことが線描きの表現の活動を過小評価することにもなっている。本論では，最も初期の線描き表現の事例を分析しながら絵が生まれる過程（みちすじ）で，何がどのように変わってくるのか，その現象をどう受け止めればよいか，より詳しく知ろうとするものである。

2 描画への接近

1）スクリブルについて

なぐり描き（スクリブル）とは基本的な線構成で幼児期の初期にはどんな絵の中にも見つけられるものである。しかしこれらは描画的活動ではあっても純粋に視覚的なものではなく，身体運動として神経系と筋肉系の連動の未分化性によるもので，腕をまわしたりする運動感覚や触覚を通して回転的空間感情を楽しんでいる姿とされている。これらについての研究はローダ・ケロッグにより詳細な分析がされ，

次の**表1**で示すように20種の基本スクリブルに整理されている。本論においては，分析されているさまざまなパターンを手がかりに，また照合しながら，みちすじを辿る。

表1　基本的スクリブル

番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
線の種類										
呼称	点	単縦線	単横線	単斜線	単曲線	複縦線	複横線	複斜線	複曲線	うねうね開線
番号	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
線の種類										
呼称	うねうね開線	ジグザグ波線	単輪線	複輪線	渦巻線	重なり円	複円周	拡がり円	単交円	不完全円

（ローダ・ケロッグの分類による）

事例1　G児　なぐり描き（1歳1～2ヶ月）

当時のことばの記録：オカアチャン，オトウチャン，バアチャン，ジージ（祖父），ムー（月），マンマ，チャチャ（お茶），アカ，アオ，モモ（桃色），ピッカピッカ，アチー（熱い），イタイ，アッコ，ココ，ハイ（返事），バイバイ，デンシャ，シンカンセン，トラック，バイク，ブーブー（自動車の総称），ニャンニャン，ポン（投げる動作），テンテン（頭をたたく動作），テ，チンチン，ポンポン，メンメ，ミミ，パッカパッカ（馬が走ること），ジュー（水などを注ぐしぐさ），バック（後さがりの動作），チッチ（鳥の声），チョウチョ，グルグル（渦巻き），ゲンチャン（自分のなまえ），ネンネ，パン，バス，ナイ，アッタ，ゴー（飛行機の爆音），コチコチ（時計），トン（落とす動作），オッポ（背おわれる）などである。これらはことばの意味と動作も関連していたものである。

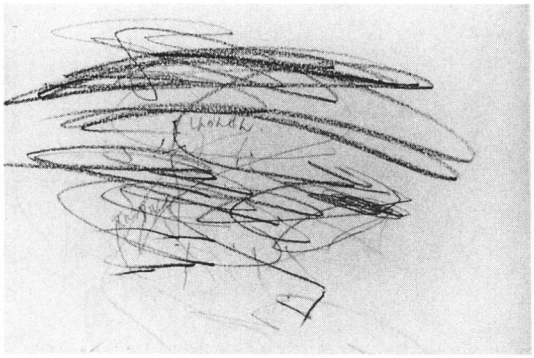
作品1　G児作品（1歳1ヶ月）　初めて持つクレヨンが珍しく，無造作に紙面をたたく動作を起こす。たたく音と共に紙面に（点，1）が打たれることに興味を示す。回数を重ねるごとに形状も少しづつ変化し興味が次第に増してきた。

作品2　G児作品（1歳2ヶ月）　手の動きがやや大きくなり，ななめ（複斜線，8）たて（複縦線，6）よこ（複横線，7）チョンチョン（点，1）の類など，やや延びのある線のなぐり描きができるようになった。これは探索的な活動のようで，紙面で手を動かして見て軌跡が生じることを喜んだりする。また時によってはことば（呟き）がつけられたり（この作品の場合，上部の複横線は「シンカンセン」），また，強い線の表現だけが行なわれたりすることもある。それらの場合には余剰エネルギーの筋肉的発散との解釈もできる。

作品 1

無造作な点描き　　G児（1歳1ヶ月）

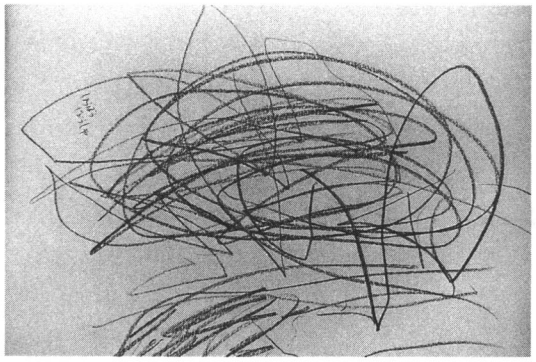
作品 2



つぶやきのつけられた線　　G児（1歳2ヶ月）

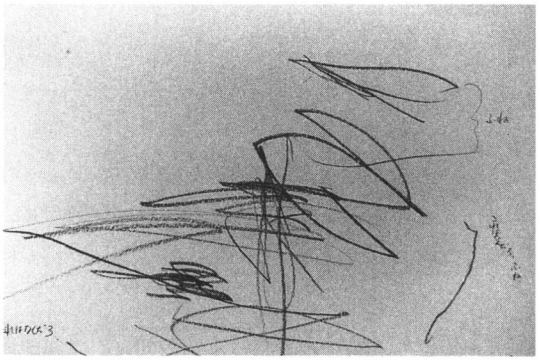
事例 2　G児（1歳5ヶ月）

作品 3



渦巻き描線　　G児（1歳5ヶ月）

作品 4



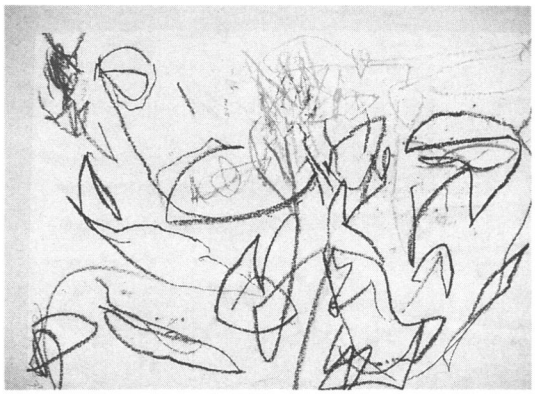
ジグザク横複線　　G児（1歳8ヶ月）

作品 3　ぐるぐる描き（渦巻き線，15）。紙面で手を動かし軌跡としての線が生じることを喜んでいるこのぐるぐるを「何かな？」と聞くと，「しょうぼうじどうしゃ」「しんかんせん」と答えた。ことばに関連づけた形象ではないが，今まで，あまりことばをもたなかったスクリブルに比べれば，ことば活動との関連が発展してきているように感じられる。また，その時々の気分によっては描かれる線ののびやかさ強さが異なる。そして活動の持続時間にも違いが生じてくる。この動作では幼児の手が回転的空間感情をもって動かされ，あたかも手が回転モーターに導かれているようである。この回転的運動の快感で満足を味わうことができるのであろう。

作品 4　1歳8ヶ月あたりから，やや遊離したなぐり描き（ジグザグ12・複横線7・渦巻き15・各単線2，3，4など）が多く見られるようになる。この時期，一本の線だけ，一つの形で丁寧に描かれる場合がある（上端の横複線は「ふね」右下斜め一本線「これなんだろう」）そしてそれらの線（形）にことばをつけているところを見出すことができる。これらの言動が象徴（命名）期への第一歩を証することになるのであろう。描く発達段階でこの行為にはきわめて重要な意義を持つと云われており，幼児にもこれから様々なことを始められるような活気が生まれる時である。この紙面の形と幼児の呟きを聴き逃してはならない。

事例3　S児（2歳7ヶ月）

作品5



いろいろな線の交わりから　S児（2歳4ヶ月）

図1（作品5より）

形とつぶやき　（2歳7ヶ月）

作品5　渦巻きや，また左右で水平の線運動や上下の線運動を繰返していくと，ジクザクやギクシャクの線の交わりなど，線の交錯から十字形が生まれることなどを発見する。中でもジグザグとか閉ざされたような形ができてくると，その箇所がイメージの手がかりとなるようである。この「閉ざされた形（かこみ・かたまり）」をイメージとして，さらにことばの発達に伴って，描かれた形に意味づけ（命名）をする。そして紙上にできた「閉じた形のようなもの」が他人に伝わり分かってもらえることに気が付くようになる。（この場合，大人の対応の態度としては幼児のことば「つぶやき」を記録などして，気持ちを十分に汲むことが重要である）。これは形を通して他人に伝わること，その反応が得られた喜びにつながる。

図1についての説明（一見すると混雑な画面であるが，経過のなかでことば「つぶやき」が付けられた形を解説すれば，左上「からす」，右下「ばった」，中央「きつね」，中央下「くるま」，右下「かいじゅう」などである。これらは何れも形を描き終わって瞬時に発したものであり，時間の経過とともにまた形，ことばはともに変化するのである。

事例4　K児（3歳1ヶ月）

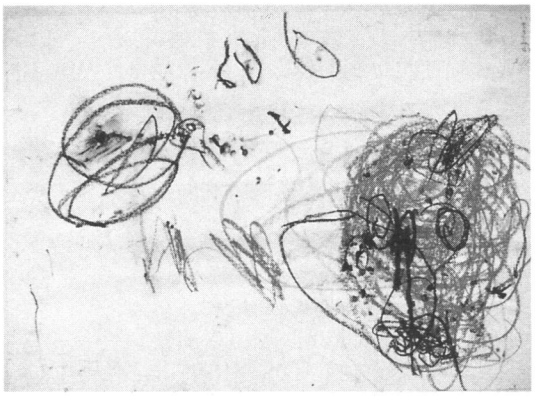
作品6　ぐるぐる描き（渦巻き，15・毛毬状線・複輪線，14・単輪線，13）などを経て，それらから抜け出して円形らしさが，描けるようになったことが大きな変化である。始発点から終結点を結ぶ操作は技術を要することであり，それには視覚的統御を必要とするからである。

この時期，外界に対する興味は強く，ことばとともにものの名前などにも高い関心を示すようになっている。覚える言葉数も非常に多く，それら憶え（知識）を円に含めて他人にも知らせようとする。

作品7　今まで見てきた腕の回転的運動では，円形として独立したフォルムについて特別強く自覚されなかったが，その描く密度を高めていくうちに一本の線での完全円“まる”の発見に行き着いた。画面に，他の線と切り離された一個の“まる”が出現したとき，その形に何かが特別な緊張を感ずるのであろう。つまり，動作を統御できるようになることは幼児にとって大きな成果である。これを機に幼児は今までの運動感覚的描きから視覚的描きにしだいに移行していくのである。

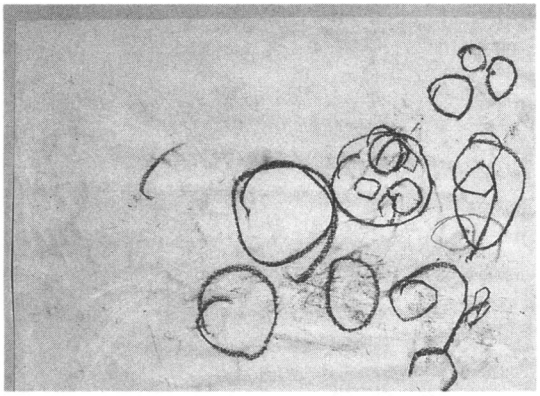
作品8　“まる”の発見は，ますます刺激となり描く動作も活発化してくる。だんだん形にも自信が

作品 6



毛毬から円形へ　　S児（3歳1ヶ月）

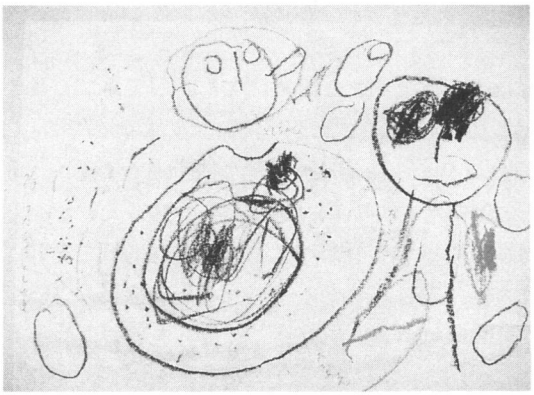
作品 7



なにでも“まるまる”　S児（3歳2ヶ月）

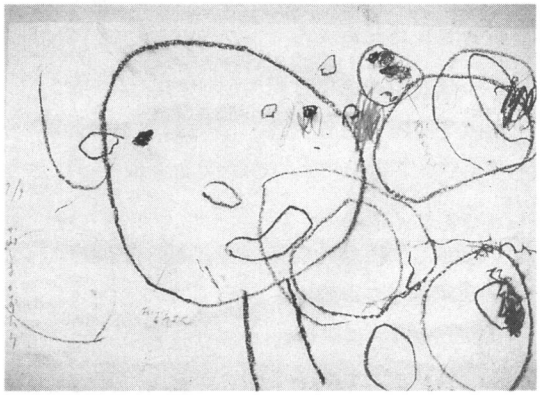
もてるようになる。動作の結果としては腕を大きく使って表現される円形の線を引くようになる。それらは，右側「おとうさん」，左下「おかあさん」，左上「ともちゃん」など，ごく身近な大人きょうだいたちとして表される。そして，このように自分の知っているものは，何でも“まる”により表現するのである。

作品 8



“まる”は身近な人　　S児（3歳4ヶ月）

作品 9



人は，みんな頭足人　S児（3歳5ヶ月）

作品 9　円形に目や口などが描き加えられると「人の顔」らしさが表わされる。そうした「かこみ」や「かたまり」の形にいきなり足らしき線が生えてきた。これが幼児期独特の「頭足人」の出現であるこの形は発達の過程においても画期的な事柄である。以後これが「人物」として意識された。

ただ頭，胴，手，足などの人間の細部を省略して単に引かれた輪でなく，この“まる”は中味のあるなにか生きた実体なのであろう。線で囲む（完結した線）ということは輪郭というものの根源的な意味をもつことがこれを通してよくわかる。

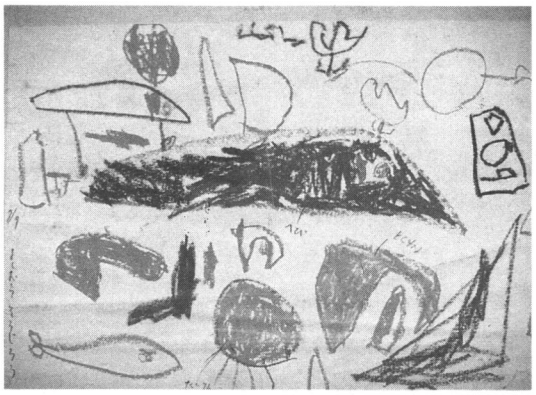
S児は描きながら，大きな頭足人を「これはおばあちゃん」右下「これはお母さん」右上小円「赤ちゃん」とか話をするようになった。このように注釈のつくことは大きな変化（進歩）である。このことはS児の思考の変化を示しているのであり，描く動作を介して，運動感覚的思考から，想像的思考に変化したのである。こうした表現の特徴の背後には，S児の精神的成長の大きな歩みがあると考えられる。

作品10　外界のものへの関心が高まり，いろいろの経験を通して知識や理解の範囲が広まると，それらの蓄積を基に外界の認識を自ら確かめるかのように，ものを描くようになった。

“まる”囲まれた線の変化はいろいろな図形を生むことを気付かせる。そこで，S児は自分の頭に浮かぶいろいろなもの，ことについて知る限り形に描き表そうとする。

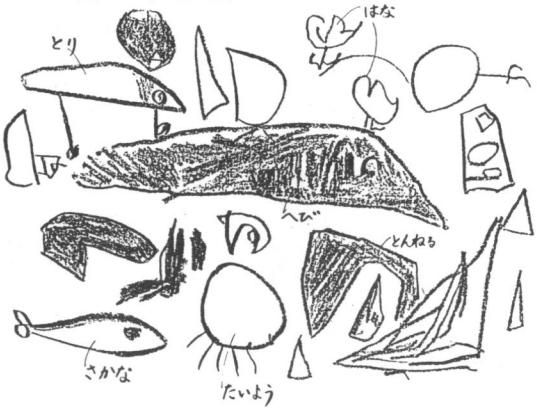
図2　いろいろの図形に注釈として「とり」「はな」「へび」「さかな」「たいよう」「とんねる」などがつけられた。S児の想像するものの形が羅列されるが，第三者にもいくらか形が判断できるような表現となった。

作品10



想像をあれこれ描き出す　　S児（3歳11ヶ月）

図2（作品10の説明）



R・ケロッグは児童画の研究のなかで『なぐり描きは紙上のさまざまな位置にされるが発達につれてしだいに簡略化され円とか長方形とかの単純な形で表されるとして，これを「図案（ダイアグラム）」と呼んでいる。そして二つの図案を結びつけて「結合画（コンバイン）」と云い，三つ以上を合わせて「集合（アグレゲイト）」と云っている。これらのさまざまな合成の中から，幼児は次第に気に入ったものを少数選んで繰返し描くようになる。このように合成図を多く描きながら，覚えて繰返し用いるうちに単位は決まって視覚上よい形のものか釣り合いのよいものかに限られてくる。そして，次第に自分の記号（シエマ）とした単位を取り込んでいくようである』と述べている。それによれば，S児の描画が，今，コンバインで表す段階に至っていることである。

3　ま　と　め

幼児は初期段階では，大人が見ているような認知にいたっていない。初めは触覚を通して知覚する経験から始まる。このように触覚に始まり視覚に至る運動機能を通して外界を認知する。1歳を過ぎるあたりから動作的思考と盛んな言語使用と相俟って象徴的思考が備わってくる。

描線のパタンはいくつかの単位もしくは要素がさまざまに関係づけられて効果を生む。単位は点，線円，かたまり等，（また基本的スクリブルも含まれる）に分けられる。それらの使用配置は発達段階のそれぞれのところで，誰の指導もなく，他を写すのでもなく自然に作り出される。むしろスクリブル動作をしつつ，そこにある形を見つけだすものである。

幼児も2歳ぐらいになると，なぐり描きの中で「閉ざされた形」をもののイメージの手がかりとして

ことばをもって意味付けをする。また「閉じた形のようなもの」が他人に伝わるということに気づくようになる。このような過程を通して，また反応を得て次第に自分の表現を深めていく。

“まる”完全円の発生は成長の段階における画期的な事柄であり，以後，象徴（命名）活動が一層盛んになる。

初期におけるなぐり描きの変化においては，用具の使用頻度（それについての経験）などにより結果には相違が生じることが考えられる。

参 考 文 献

1）平岡　節『乳幼児の美術』明治図書：1980
2）W．グレツィンゲル『なぐり描きの発達過程』黎明書房：1978
3）村山久美子『視覚芸術の心理学』誠信書房：1989
4）八木絃一郎『造形の誕生』青木書房：
5）ローダ・ケロッグ『児童画の発達過程』黎明書房：1976
6）鬼丸吉弘『児童画のロゴス』勁草書房：1981
7）園田正治『子どもの絵と大脳のはたらき』黎明書房：1977
8）グッドナウ／須賀哲夫『子どもの絵の世界』サイエンス社：1979